

クイア理論を地域研究に応用するための序論 地域研究に新たな視点をもたらすための 試み、その理論的枠組みの提示

山田創平

研究目的

ある地域に対しある種の個性を見だし、その地域をそのような地域であるとして認識することが、従来の都市地理学における空間認識の正統な手続きであったことは疑いようもない。「都市」「農村」「工業地帯」「郊外」など、地域に与えられたこれらの名称は、同時にその地域を広く覆う個性の表現であり、その地域の表象を代表するものでもあった。しかし改めて指摘するまでもなく、地域は常にグラデーションであり、「都市」と「農村」の境界を明確に区別する論理的根拠を見いだすことはあらかじめその失敗が運命づけられているといえる。なぜならばそのような分類や、領域の設定には常に意図があり、その意図は常に資本や法といったような権力関係の枠組みに従ったものとなっているからである。たとえば地理学における「都市」の定義は以下のように記述される。

都市は大きい人口集団が密集した地域で、第2次・第3次産業に主として依存するとともに、周囲の地方の中心として高次の社会的・経済的・文化的活動が行われ、そのため複雑で多様な構成を持つところであるといえよう。¹

この定義における「人口集団」にはいったい誰が含まれるのだろうか。特別な意図や配慮がない限り、統計上計数不可能なホームレスや不法在留外国人はここには含まれない。このような排除を生む原因はそもそも地理学における都市が「産業」「高次の社会的・経済的・文化的活動」によって定義されている点にある。このような分類からこぼれ落ちる現象は「複雑で多様な構成」とひとくくりにされるか、そもそもそのような留保表現にさえ含まれることはない。「生産」や「高次の社会的・経済的・文化的活動」という資本の論理、生活様式の支配的特徴に依拠したイデオロギーが、見えざる権力関係の枠組みとして

「都市」の定義を構成している。つまり、完全に、疑いようのない、所与の領域としての、自然な「都市」はそもそも存在しないということになる。このような、分類や定義という行為の背後にある権力構造に対する問いかけは、ポスト構造主義の論調がしばしば指摘するところのものである。

では、そのような立場、すなわちあらゆる分類や定義には見えざる権力関係を背景とした意図が介入するのであって、これこそが正しい分類、定義であるという真理は存在しないという立場を確認した上で、現在までになされてきたそのような分類、定義を検討しようとする時、どのような方法が有効なのかという問いが想起できる。ジュディス・バトラーはその問題に対し、『ジェンダー・トラブル』において次のように述べている。

現在の権力の磁場を構築しているのは、まさに言語や政治の法構造である。したがってこの権力の磁場の外側にどのような立場もありえず、ただできることは、権力がみずからの正当化をどのようにやってきたかを、系譜的に、批判的にたどることだけである。²

『ジェンダー・トラブル』における指摘は、権力関係に外部はないが、それでもその権力関係、覇権的体制を客観視し、疑問に付そうとする場合には、その覇権的体制そのものが、どのように自己を正当化してきたかを探ることが重要な手法になるという指摘である。覇権的体制は分類の役割を担い、それに名前を与える。あるカテゴリーがあり、それに名前が付けられるのではない。名前が付けられるがゆえに、以降、それはそれとしてカテゴライズされるのである。バトラーの指摘はその過程をたどるべきであるというものである。そしてこの手法はかつてミシェル・フーコーによって具体的に示されたものであった。ミシェル・フーコーは『言語表現の秩序』において、次のように指摘している。

かつてわたしは、排除の機能の一つについて、ある一定の時期を対象として、研究したことがあった。すなわちそれは、古典主義時代の狂気と理性の分割に関わるものであった。それ以後、言説の禁止のシステムを分析することも試みることができましょう。すなわち、16世紀から19世紀に至るまでのセックスに関係したものであります。ここで問題なのは、おそらく、その禁止のシステムが次第に、どのようなかたちで幸いに姿を消したかを見ることでは断じてなく、禁じられた行いが名づけられ、分類され、階層化されていた（それもこの上なくあからさまに）告解の実践から、19

世紀の医学や精神医学のなかに、セックスに関する主題群が、まず大そう臆病に、また大そうおくれればせに、現れるに至るまで、どのようにしてそれが移動され、再分節化したか、を見ることでありましょう。³

フーコーの指摘は排除によって成立するあるカテゴリー、構造（たとえばホームレスの排除によって成立する地理学上の「都市」というカテゴリー）は、自然なものではなく、またあらかじめあるものではなく、人為的に作られたものであるという指摘である。そして、そのような事実はその発生を見ることによってわかるのであり、そのような手法を「系譜学的」と称している⁴。さらに重要な指摘は、言説の禁止のシステムをセックスとの関わりで考察すべきであるという点である。バトラーもまた、言説の禁止によってもたらされるカテゴリー（そしてそれはアイデンティティと言い換えることもできるわけだが）は、男根ロゴス中心主義、強制的異性愛主義をその根拠としているとしたうえで、系譜学的な批評の目的を以下のように指摘している。

（系譜学的な批評の目的は）多様で拡散した複数の起源を持つ制度や実践や言説の結果でしかないアイデンティティのカテゴリーを（中略）そのような定義づけをおこなう制度 - 男根ロゴス中心主義や強制的異性愛 - に焦点を当てて分析し、そして次に、そのような制度を脱中心化することである。⁵

本論では伝統的な地域研究の手法が見えざる権力関係に対して無批判であり、従って男根ロゴス中心主義や強制的異性愛主義に、確信的ではないにせよ荷担してきたという事実を示し、よってそのような伝統的な、覇権的な権力構造に依拠するような手法によって、研究の対象から外されてきた現象があることを確認する。外されてきた現象とは、すなわち男根ロゴス中心主義や強制的異性愛主義によって表象代表される現象以外の全てであり、例えばそれは（そしてこの場合、とりわけ地理学においては）同性愛者であり、ホームレスであり、ストリート・チルドレンなどである。これらは男根ロゴス中心主義や強制的異性愛主義のヘゲモニーによって排除されてきたものであり、異性愛 - 結婚 - 家族という近代の権力構造から外れた現象であり、それゆえに隠蔽されてきた。そしてそれは地理学においても同様であった。このような、近代の覇権的な権力構造によって隠蔽されてきた周縁的な現象の分析に有効とされるのがクイア理論である。

本論においては地域研究、とりわけ都市研究にクイア理論を用いることの有効性を指摘し、いかに従来の地域研究が、そもそもその研究の前提とする伝統的な手法においてさえも、男根口ゴス中心主義や強制的異性愛主義という覇権的異性愛主義にのっとったものであったかを指摘する。その上で、今後の地域研究の手法として何が重要であるのかを示し、その方法論の端緒を開きたい。今後の研究において、本論で展開された理論的な枠組みは、フィールドワークによって実証されてゆくこととなる。

クイア理論を用いる前提となるもの

本論においては、地域研究、とりわけ都市研究にクイア理論を用いることの有効性を指摘する。そして、とりわけ同性愛にその論述の起点をおく。このことは、都市においては同性愛という性的指向が、同性愛者という言葉でもって、ある場合、ある領域において顕在化するという事例が確認できることの重要性にかんがみ得ることである。覇権的異性愛主義の文化的状況下において同性愛者は常に分析の対象となり、語られ、分類されてきた⁶。この種の分類はつねに覇権的文化がその役割を担い、彼らに、我が国においては、憲法上守られなければならないとされる基本的な権利を認めることなく、長きにわたり同性愛者の差別⁷に寄与してきた。地理学においてこの問題を考えようとするれば、同性愛者をその地域の主体としてとらえた研究の必要性がおのずと想定される。

ではクイア理論の立場に立ったとき、地域を研究するという行為そのものは、そもそもどのようなものであり得るのだろうか。分類することをやめること、あるいは地図化することをやめること、数値化することをやめること、といったような手法は、この場合どの程度有効なのだろうか。本論の目的は地域を分類するという、伝統的な地域研究の手法そのものが、どのように覇権的異性愛主義に立脚しているかを指摘したうえで、新たな地域研究の可能性を探ることにあるが、研究の手法として、全く正反対の立場、すなわち覇権的異性愛主義からこぼれ落ちた現象を「分類」することが有効なのかといえそうではない。本論においてクイア理論を用いることの意味はそこにある。『ジェンダー・トラブル』においてバトラーはつぎのように指摘している。

おそらく問題は、さらにもっと深刻なものである。女というカテゴリーを首尾一貫した安定した主体として構築することは、ジェンダー関係を無意

識に規定し、物象化してしまうことにはならないか。それにそのような物象化は、フェミニズムの目標とはまるで正反対のものではなからうか。異性愛のマトリクスの文脈の中で、女というカテゴリーはどの程度、その不動性と一貫性を獲得しているのか。もしもジェンダーという不動の概念が、もはやフェミニズムの政治の基盤をなす前提とならないなら、ジェンダーやアイデンティティの物象化に異議を申し立てるには、新しい種類のフェミニズムの政治が求められるべきで、そこでは、アイデンティティの可変的な構築が、政治目標ではないにしても、方法論と基準設定の二点において必要条件とされるべきである。⁸

バトラーのここでの指摘を地理学に敷衍するならば、いままで異性愛のマトリクスの文脈の中でけっして語られることのなかった同性愛者を地理学的に捉え直し、新たな地理学の領域を切り開くということが、地理学という学問領域そのものの覇権的異性愛主義からの脱却を導かないということである。それはいわば再生産であり、新たな分類、カテゴリーの再生産は、結局のところ覇権的異性愛主義の強化と再生産に寄与するだけなのである。

以上のような指摘に関して、地域研究では次のような事例を考えることができる。ジョン・ビニーとジル・バレンタインは“Geographies of sexuality a review of progress”の中で、セクシュアリティと空間に関する最初期の業績としてマニュエル・カステルズの『都市とグラスルーツ』⁹をあげたうえで、カステルズの業績が今日にあって支持できるものではない理由を以下のように述べている。

カステルズは、ゲイ男性の地理やレズビアン地理が、それぞれのジェンダー役割やジェンダー化された行動を反映していると主張したのだった。(中略)レズビアンとゲイ男性(の様に見える)人々両者についてのカステルズの仮定から結論づけられるのは、レズビアンとゲイ男性が互いに、そして異性愛者の社会ともかけ離れた生活を営んでいるということであった。今日、これらの短絡的な仮定は非常に問題があり、とても支持できるものではないとみなされよう。¹⁰

カステルズの結論がはらむ問題点は、その結論に同性愛者のコミュニティの持つ不可視性に対する配慮がなく、結果的に同性愛者のコミュニティが異性愛者のそれとは隔絶しているという結論へと至る部分である。そのようなカステルズによる覇権的で権力的な分類に異議を申し立てるべく、その後進展したレズ

ビアン・コミュニティに関する一連の研究¹¹では、レズビアン・コミュニティが異性愛者の社会と深いつながりを持つがゆえのコミュニティの不可視性を結論付けるに至ることとなる。ここでは、バトラーの指摘を思い起こすことができる。コミュニティが不可視であることは、いわば当然のことで、このことはバトラーのいうアイデンティティのパフォーマティヴィティに依拠し説明することが可能である。バトラーはアイデンティティのパフォーマティヴな側面を以下のように説明する。

だがそもそも同一化は、演じられる幻想であり体内化であるという理解によれば、首尾一貫性は欲望され、希求され、理想化されるものであって、この理想化は、身体的な意味づけの結果であることは明らかである。換言すれば、行為や身ぶりや欲望によって内なる核とか実体という結果が生み出されるが、生みだされる場所は、身体の表面のうえであり、しかもそれがなされるのは、アイデンティティを原因と見なす組織化原理を暗示しつつも顕在化させない意味作用の非在の戯れをつうじてである。一般的に解釈すれば、そのような行為や身ぶりや演技は、それらが表出しているはずの本質やアイデンティティが、じつは身体的記号といった言説手段によって捏造され保持されている偽造物にすぎないという意味で、パフォーマティブなものである。ジェンダー化された身体がパフォーマティブだということは、身体が、身体の現実をつくりだしている多様な行為と無関係な存在論的な位置をもつものではないということである。¹²

そもそもレズビアンというアイデンティティがあるとしてもそれはパフォーマティブなものであり、そのようなパフォーマンスが言説として覇権的ではない以上、そのようなパフォーマンスが、実体として(マテリアルな構造物として)表出することはない。ゲイというアイデンティティが、男性ジェンダーに依拠しているがゆえにレズビアンというアイデンティティよりも覇権的であるとするならば、ゲイ・コミュニティーが地表面上に実体化し、多くの地理学的業績を生み出している一方で、レズビアン・コミュニティーに関する研究が、結局のところその不可視性を結論付けるにとどまるということの理由も理解できる。

このような現状をふまえ、地域研究をおこなうとするならば、我々が目を向けなければならないのはパフォーマティブなアイデンティティが、それをパフォーマンスすることで、実体としての空間を占めてゆく、まさにその過程そのもの

である。パフォーマンスが都市の現実的な構造物によってどのような規制や命令を受け、その質的变化を遂げるのか、というその変化の道筋は模倣され再生産され、やがて都市の構造そのものにも影響を及ぼすようになるだろう。しかし都市の構造として固定化されたものは順序からいえば常にパフォーマンスの後に続くものであり、その事後的なもの（つまりマテリアルな構造物）をカテゴライズし、分析することはアイデンティティの固定化を意味するという理由で、都市の実態を示すことにはつながらない。都市の実体とは、建築や空間そのもののことではなく、パフォーマンスなアイデンティティが、それをパフォーマンスすることで、実体としての空間を占めてゆく過程そのものの集合体のことである。集合体の内実は各々異なり、その意味で、都市の実体とは差異の集合体のことであるとも言える。そのうえで、その過程を再検討し、従来の都市に関する記述をあらためてゆくという作業が重要となる。それは、いわば戦略的な営みであり、霸権的異性愛主義が担う一連の文化的、政治的状況が行き詰まりをみせる現状下において、そのような体制からこぼれ落ちてきた人々をすくい上げるための、指向的な方法論であり、そのような方法論は、昨今クイア理論としてとらえられている。

クイア理論とはどのような理論か

(1) クイアという用語の出自

同性愛者の権利獲得のための学問、いわゆるレズビアン・スタディーズ、ゲイ・スタディーズなどと呼ばれる学究は、同性愛がアイデンティティであるという立脚点を持って、初めて成立したものであった。その当初において、カミングアウトや訴訟といった手続きが重要であったことは見逃すべきではない。なぜならばそのようなアイデンティティを前面に押し出す形での一連の手続きは、きわめて戦略的であったがゆえに、多くの場合成功を収め、我が国における同性愛者に対する認識の向上に寄与したからである。¹³

しかしレズビアン・スタディーズ、ゲイ・スタディーズの興隆によって見えてきたものは、レズビアンやゲイの存在が大きいがゆえに、その中に覆い隠されてきたさらに小さな性的少数者（周縁的な性的少数者）の姿であった。たとえばバイセクシュアル¹⁴、トランスセクシュアル¹⁵、トランスジェンダー¹⁶、トランスベスタイト¹⁷といったような人達である。そしてこれらの人達を取り込み、あらゆる性的指向を包括する用語としてクイアが現れた。クイアは英語

圏において同性愛者を指し示したうえでそれをネガティブに差別化する用語として長く使われてきた。しかし、そのような差別的な用語を被差別者である同性愛者があえてポジティブに使用することによって、意味を逆転させ、権利獲得運動における連帯の結束点として掲げた。それはセクシュアル・マイノリティの個々の差異を越えた連帯の道を模索する概念であり、同性愛/異性愛という二項対立そのものを作り出す「権力」の枠組みそのものをみわたそうという試みである。

しかしクイアというある種の連帯の結節点としての表象が、レズビアンという本質、またはゲイという本質などは存在しないと言いきるのは、あまりにも繊細さを欠き、現実を無視した態度であるという批判も存在する¹⁸。しかし、クイアという言葉がアイデンティティに対する懐疑を正確に指摘し同性愛/異性愛という二項対立そのものを作り出す「権力」の枠組みを脱構築するきわめて有効な手段である点は、近年における、いわゆる「クイア理論」の充実ぶりを見るに、明らかである。

(2) クイア理論とは何か

クイア理論の意味はジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』においてきわめて論理的に示されている。

セックスの自然な事実のように見えているものは、じつはそれとは別の政治的、社会的な利害に寄与するために、様々な科学的な言説によって言説上、作り上げられたものにすぎないのではないか。セックスの不変性に疑問を投げかけるとすれば、おそらく、「セックス」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスは、つねにすでにジェンダーなのだ。そしてその結果として、セックスとジェンダーの区別は、結局、区別などではないということになる。¹⁹

これはセックスとジェンダーの対置の構図こそが、男根口ゴス中心主義や強制的異性愛主義という覇権的異性愛主義の作り上げたものであり、このような枠組みに無批判に依拠する限り、そのような枠組みがそもそもどのような枠組みであるのかを知ることも不可能であるという指摘である。つまりここにおける主張は、セックスさえも社会的に作られたものであり、セックスは常にジェン

ダーなのであるというものである。それは今まで究極的に本質であり、動かしがたい真実であるとされてきたものさえも、その真実の成立の成り立ちをたどれば、その真実の背後にひそむ権力関係が言説化し、構築した虚構にすぎないということがわかるだろうという指摘であった。このようにクイア理論はいわば本質主義に対する異議申し立てであり、その理論の形成過程は、セクシュアル・マイノリティの権利獲得の過程と重なっている。しかしながらそのような権利獲得の過程、すなわち霸権的異性愛主義社会に対する闘争の歴史が、やがてクイアという可変的な、非本質主義へと収斂してゆくなかで、アイデンティティをめぐる問題が提起される。

クイア理論は、セクシュアリティの政治においてアイデンティティが使われざるをえない場面を否定するわけではないが、アイデンティティに対してより懐疑的であり、アイデンティティの政治の陥穽を指摘する。そもそも、アイデンティティとは、それ自体としては独立に成立せず、必ず他者の排除の機制を必要とする以上、アイデンティティの構築自体がすでに問題を孕む。²⁰

同性愛者のアイデンティティ獲得の歴史が、その結論的な立場としてアイデンティティそのものを検討しようとするクイア理論をもたらしたという事実関係を考えるとき、クイア理論がはらむ重要な問題が想起される。それは、端的にはアイデンティティという結節点がなければセクシュアル・マイノリティにとっての有効な闘争理論にならないということであり、さらにはその結果として戦略的本質主義、すなわち理論的にはパフォーマティブであるがゆえに名づけ得ないものであるセクシュアル・マイノリティのアイデンティティを闘争のために創出する、という中庸な妥協点を生じさせることによって、そもそも批判すべき対象であったはずのセクシュアリティとアイデンティティの結託に逆に加担することにもなりかねないということである。この問題に関して、ジュディス・バトラーは論文「批評的にクイア」のなかで、つぎのように述べている。

アイデンティティ・カテゴリーが遂行する臨時的な全体化は、必要な誤謬である。もし、アイデンティティが必要な誤謬であるならば、「クイア」という主張は、提携を示す語として必要ではあるが、しかし、その代表とされるものを十分に説明するものではない。²¹

ここでは戦略的本質主義に代表されるようなカテゴリーの臨時的な全体化は、必要な誤謬であるとされている。闘争のためには必要だが、しかしながら、そのカテゴリーは誤っているのだから、その内実を正しく説明できるものではない、ということである。そして、さらにつぎのように述べる。

前もって完全に限定されることのない言説上の場であることは、クィア政治の民主化を継続するためだけではなく、この語の特定な歴史性をさらし、確認し、かつ改訂するためにも弁護するべきである。²²

バトラーのこの指摘はクィア理論があいまいな形でではあれ、闘争の結節点としては有効であり、それは戦略的本質主義に代表されるようなカテゴリーの臨時的な全体化が、誤りでありながらも闘争の結節点としては有効であるのと同様であるということを示している。そのうえでクィア理論はアイデンティティを形作る言説のあり方として、それが民主的に、常に検討され、改められなければならないものであり、それが達成される限りにおいては有効であるとしている。しかしながらクィア理論とアイデンティティをめぐる問題に関しては、現在も様々な議論があり、その結論は一定しない。しかしながら、アイデンティティが常に検討されなければならないという意味においてはそれらの議論は一貫しており、その意味でクィア理論の実践的な応用における成果には注目すべきものがある。以下でその研究成果を概観しつつ、その地域研究への展開の可能性を考えたい。

クィア理論の地域研究への応用

イヴ・コゾフスキー・セジウィクは著書『クローゼットの認識論』のなかでつぎのように指摘している。

本書は、近代西洋文化の実質上どのような側面についての理解も、近代のホモ/ヘテロセクシュアルの定義に関する批判的な分析を含まない限りは、単に不完全というだけではなく、その本質的部分に欠陥を持つことになる
と主張するのであり、また、そのような批判的分析を始める適切な場は、近代のゲイ理論および反同性愛嫌悪の理論という、相対的に中心から外れた視点からであると、仮定する。²³

『クローゼットの認識論』においては、文学的に正典（キャンノン）であるとされてきた作品を分析することにより、そこにいかなる隠された意味があるかを

明らかにしている。そしてそれが隠された過程を明らかにする。そこから浮かび上がるのは西洋近代社会がもつ、同性愛者を囲い込み分類することによって、それ以外の男性同士の絆を正当化するというプロセス(ホモフォビア)であり、同性愛に関わる秘密が公然の秘密(クローゼットにたとえられる)であり、その秘密は常に見られることにより見る側の視線によって対象化されるということであった。この種の既存のテキストに対する再読の試みは、地域研究においても展開されている。デービット・ベルによるバイセクシュアリティに関する地理学的研究においては、アイデンティティ・ポリティクスを論拠としたレズビアン・ゲイの地理学を批判的に検討し、そのような覇権的同性愛主義のなかでバイセクシュアルの人々が場所を持つことができず、ツーリストになっている現状(没場所性、ホームレス性)を指摘している。²⁴

本論においては、クイア理論の地域研究への応用として、覇権的異性愛主義からこぼれ落ちる言説を地域においてとらえ、その言説がその地域においてどのように現実都市構造として反映されてゆくかを調査することが今後の地域研究において重要であると主張する。この場合、都市とは言説の集合であり、その言説が覇権的であった場合それらの言説は実体としてその地域においてマテリアルな構造物を獲得することになる。しかしながら、言説が覇権的ではなく、覇権的異性愛主義からこぼれ落ちる種類のものであった場合、それらは実体としてその地域においてマテリアルな構造物を獲得することにはならない。その意味において、都市とは言説の差異そのもののことであり、その差異は常に可変的で流動的である。1980年代に入り、いわゆる新宿2丁目や大阪堂山町²⁵、名古屋女子大通り²⁶などがゲイタウンとして言説化されるに至る過程は、それらの言説が、被差別的であり、被抑圧的ではあっても、一定の商品交換価値を持ち、それゆえに覇権的言説となって実体化した例であると理解できる。そのことはこれらの地域においてレズビアンやバイセクシュアルがいっこうに語られず、バーやクラブ、ハッテン場²⁷などの都市的実体においてもレズビアンやバイセクシュアル向けのものが確認しがたい現実によっても理解できる。都市が常に変化する可変的で流動的なものであるとするならば、都市とはすなわち都市が生成される瞬間の連続のことであり、それはクイアな言説が覇権的言説へと与する瞬間のことである。法、統治、資本といった外的制約を受けながらも、今日都市は確実にその連続を続けており、その結果としての現象を我々は目にすることができる。この種の研究は現在、我が国におい

ては一例もなされていない。本論においてはここまで我が国における都市を想定してきたが、いずれそもそもの理論的背景であるクイア理論がはらむアイデンティティの問題、とりわけ西洋的アイデンティティと東洋的アイデンティティの相克や、ベルに代表される欧米での研究成果を日本的土壌の上に成り立つ日本の都市空間の分析に援用することの問題はあらためて検討されなければならない。いずれにせよ、本論において示した都市研究の新たな可能性は今後ますます重要になる。その最初の手続きとしてまずは従来の都市研究、地域研究、地図化などによってはとらえられていない都市内現象を拾い上げることから始めなければならない。

註

- 1 日本地誌研究所(1989) 『地理学事典』 二宮書店, 507 頁。
- 2 J.バトラー著,竹村和子訳(1999) 『ジェンダー・トラブル: フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社, 25 頁。
- 3 M.フーコー著,中村雄二郎訳(1981) 『言語表現の秩序』 河出書房新社, 62 頁。
- 4 フーコー同上書, 62 頁。
- 5 バトラー同上書, 10 頁。
- 6 ミシェル・フーコーは『性の歴史 : 知への意志』において、その課程を「言説の爆発」として詳細に説明している。第2章の1「言説の煽動」がそれである。M.フーコー著, 渡辺守章訳(1986) 『性の歴史 : 知への意志』 新潮社。
- 7 婚姻に代表される性的指向による差別。同性愛者間の結婚に関しては欧州で1992年にデンマークで法的に認められて以来、ノルウェー(93年)、スウェーデン(94年)、オランダ(98年)などにも広がった。
- 8 バトラー同上書, 25 頁。
- 9 M. Castells 1983: *The city and the grassroots*. Berkeley, CA: University of California Press. 本書は都市論においてマイノリティに注目した研究としてその嚆矢とされるため、重要書と見なされている。以下の邦訳がある。カステル, M. 著, 石川淳志監訳(1997) 『都市とグラスルーツ: 都市社会運動の比較文化理論』 法政大学出版局
- 10 J. Binnie and G. Valentine 1999: Geographies of sexuality – a review of progress. *Progress in Human Geography*, 23 - 2, 175-187
- 11 Sy Adler やJoanna BrenrLer による、アメリカ・ノースウエストの都市にある、特定はされていないレズビアン・コミュニティに関する研究や、アメリカのレズビアン居住地区であるグランド・ラピッズ(Grand Rapids)に関するPeak による以下のような研究がある。
L. Peake 1993: 'Race' and sexuality: challenging the patriarchal structuring of urban social space. *Environment and Planning D: Society and Space* 11, 415 - 32.

- Adler, S. and Brenner, J. 1992: Gender and space: lesbians and gay men in the city. *International Journal of Urban and Regional Research* 16, 24 - 34.
- 12 バトラー同上書, 239 頁 - 240 頁。
 - 13 アカー（動くゲイとレズビアン会）による府中青年の家訴訟が代表例。東京都の施設である府中青年の家の利用に関して、同性愛者であることを理由とした差別があったとして1990年提訴、1997年に、東京都教育委員会を含む行政当局としては、その職務を行うについて、少数者である同性愛者をも視野に入れたきめの細かな配慮が必要であり、同性愛者の権利、利益を十分に擁護することが要請されているものと言うべきであって、無関心であったり知識がないということは公権力の行使にあたるものとしては許されないことである、として東京高等裁判所において勝訴確定。
 - 14 両性愛者と訳される場合があるが、定義には若干の揺らぎがある。ゆえに「性的対象として対象を選ぶ場合に、対象の性差がどちらでもよい人」や「性的活動において性差や社会的性差を考慮に入れない人」などの文脈に応じた説明が付されることもある。
 - 15 自らの性別（定義上生物学的な性別）に対して違和感を持つ人。
 - 16 自らの社会的性別（ジェンダー）に対して違和感を持つ人。
 - 17 異性装を好む人。この場合の「異性」は性別（定義上生物学的な性別）が異なるという意味と社会的性別（ジェンダー）が異なるという意味の両方がある。
 - 18 砂川秀樹、野口勝三「クィアが問題か、クレゾールが問題か：アイデンティティをめぐるゲイ・リベレーションの争点と展望」、(伏見憲明編『QUEER JAPAN vol.4』、勁草書房、2001、所収)、237～255 頁。
 - 19 バトラー同上書, 28 頁。
 - 20 伊野真一「構築されるセクシュアリティ」、(上野千鶴子編『構築主義とは何か』、勁草書房、2001、所収)、196 頁。
 - 21 「批評的にクィア」、(『現代思想 vol. 25-6』、青土社、1997、所収)、164 頁。
 - 22 「批評的にクィア」、164 頁。
 - 23 E.セジウィック著、外岡尚美訳(1999)『クローゼットの認識論：セクシュアリティの20世紀』青土社、9 頁。
 - 24 D.Bell 1994: Bi-sexuality – a place on the margins. In S.Whittle, editor, *The margins of the city*, Aldershot: Ashgate, 129 - 41.
 - 25 大阪府大阪市北区堂山町。
 - 26 愛知県名古屋市中区栄4丁目にある通り。
 - 27 同性愛者専用のクルージングスポット（性的接触を持つための相手を捜す場所）のこと。有料の施設と、公園などの公共性を持った場所でなおかつ同性愛者間でハッテン場であると広く認識されている場所の2種類がある。またハッテン場に関しては以下の研究がある。砂川秀樹「『ハッテン場』など日本のゲイをとりまく性的環境の調査、分析」、(『日本性研究会議会報』第9巻第1号、1997、所収)